

「中学でも全国へ」

第16回KENKO CUP 全国ジュニアソフトテニス大会 ベスト8 宮城県A 菅原茉倫



Sugawara Marin

2005年5月13日生まれ、南方町北本郷、東郷小卒。姉と兄の影響で、小1でソフトテニスを始め、南方ジュニアソフトテニススポーツ少年団に入団する。入団後すぐに才能が開花し、小2で県内のトップに立ち、宮城県の柱として同年代をリードしてきた。身長145センチ。父、母、姉、兄の5人家族。

「昨年は予選で負けて、決勝トーナメントに進めず悔しい思いをしました。チーム全員で「絶対に上位入賞しよう」とって約束していたから、本当にうれいしです」と、瞳を輝かせる菅原。

第16回KENKO CUP全国ジュニアソフトテニス大会(以下、ケンコーカップ)は2017年12月23日から25日まで、埼玉県熊谷市の彩の国くまがやドームで開かれ、宮城県Aチームは8強入りした。

ケンコーカップは、全国から選抜チームが集まり団体戦で競われる。大会は、各予選リーグに4チームが振り分けられ、上位2チームが決勝トーナメントに進出し、下位2チームが下位トーナメントに回る。試合は3組の点取り戦。宮城県選抜は昨年、下位トーナメント4強を賭けて青森県選抜と対戦した。菅原は、本年度のジャパンジュニアカップU14シングルで準優勝した天間ペアに勝利するも、チームは1-2で敗退。選手、関係者共に「上位進出」に強い思いを持っていた。

予選リーグ1試合目、東松山ジュニアテニススポーツ少年団(埼玉)と対戦。菅原ペアは、順当に実力を発揮し勝利。チームも、3-0で勝利を収めた。2試合目のもぐらクラブ(千葉)も3-0で勝ち、1位突破を賭けて和歌山県Aと対戦。和歌山県は全国トップレベルの強豪だ。菅原は小4からペアを組んでいる

仙台長名ヶ丘の安曇桃花と2組目に登場。1組目は宮城が勝ち、菅原・安曇組が勝てば1位通過が確定する。相手は一番手のペア。大会中、対戦相手の試合を分析していた菅原は「隙がなく強い相手。厳しい試合になる」と予想していた。善戦したが、最後の一手が出ず惜敗。チームも1勝2敗で予選は2位となった。全国トップクラスの相手とはいえ、悔しさをあらわにする菅原。トーナメントでのリベンジを誓った。

決勝トーナメントは、1回戦を順当に勝ち上がり、2回戦は南大師ジュニア(神奈川)と対戦。南大師は関東の強豪で、今大会も昨年度の優勝チームを破り波に乗っている。1勝1敗で菅原・安曇ペアに全てを託された。堂々とした戦いぶり、最終手を圧倒、8強入りを決めた。

準々決勝は東北王者の山形県選抜Aと激突。山形とは、年に何度も練習試合や合同合宿などで顔を合わせ、お互いを知り尽くしている。1組目が完敗し、後のない状況で菅原に出番が回ってきた。相手は東北2位の滝口・氏家ペア。試合前、いつものように乱打で相手の様子を探る。一人が足を負傷していることに気付いた。ペアの坂井里帆(仙台)と、「コートセンターにバックハンド狙い」を徹底することに。作戦が当たり、1ゲーム目を取り先制する。2ゲーム目は相手が粘りを見せ、ゲームカウント1-1に。3ゲーム

目、相手は菅原を狙ってきた。それでも菅原・坂井は動じない。ミスすることなく、徹底的にセンターへ打ち返し、3ゲーム目を奪い返し2-1とリードをかけた。4ゲーム目は、センター返しだけではなく、前後に揺さぶりをかけ相手を手玉に取り、見事東北2位ペアを撃破した。チームも勢いづいたが、3組目が接戦の末、東北3位ペアに破れ8強で終わった。敗れたとはいえ、全力を尽くしての8強入りに、選手、関係者全員が胸を張った。

菅原のテニス人生は小1から始まった。姉と兄が南方ソフトテニススポーツ少年団で活動しており、気付けばテニスラケットを握っていた。類いまれなテニスセンスで、小3で小4以下の全国小学生選手権大会県予選で優勝するなど、すぐに頭角を現した。

父であり、コーチである菅原賢さんは「分析能力が高く、プレーやゲームの中で組み立てられ、テニス脳が賢い。ショットのコントロールがよく、誰が相手でも物怖じせず、自分のテニスを貫く」と目を細める。東郷小を卒業し南方中に進学、今後もテニスを続ける。南方中は東北トップレベルの強豪校で、菅原があこがれている白鳥和(和歌山)は「和先輩たちと練習することでもっと上達できます。団体を全国を目指します」とにっこり。南中女子テニス部から目が離せない。



菅原が所属する「南方ソフトテニススポーツ少年団」。週2日、仲間と共に切磋琢磨している。